

平成三十年度生 入学選考試験 国語 「特待生入試」

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

メディアの提供する物語はさまざまであるが、それらは必ずしも同じ平面に並んでいるわけではない。ある物語が提供され、広まると、しばしば別のメディアによって、その物語についての物語が提供され、さらにその第二の物語についての物語……というふうにつみ重なって、いわば①多層化していくことが少なくないからである。情報化社会において情報の多様化が進むとよくいわれるが、多様化は同時に「多層化」をともなっている。そして、こうした情報についての情報、物語についての物語といった一種のメタ情報は、しばしば、裏情報あるいは裏話の性質をもつ。

裏情報とか裏話というと、何かひそひそと囁かれるものというイメージがあるが、マスコミの発達した現代社会では、むしろ②この種の情報がメディア（とくに週刊誌やテレビ）の売り物となり、広く流通している。

一般に近年のマスコミは「美談」を提供することが少なくなってきたが、たとえそのような美しい物語が提供されても、たちまち「あれは実は……」といった裏話的な情報があらわれ、はじめの物語をひっくり返してしまふ。裏話には「表」にあらわれているタテマエや理念を相対化し「脱神話化」する働きがある。こうして、情報の「多層化」は、神話的あるいは **A** な含みをもつ物語の力を③スイジャクさせる。（中略）

裏話によって④ショウウチョウウされ、かつ形成される世界観の根底には③一種のシニシズムがある。つまり、「表」にはいろいろきれいごとが示されても、結局のところ、人間も、人間の集団や組織も、利己的な動機で動く。どんなに立派にみえる行動も、裏の動機をさぐれば、必ずや権力欲、物欲、性的関心、保身や組織防衛の必要などにゆきつくだろう。そういうものの見方である。（中略）

しかし、裏話や裏情報というものは、ほんらい、意地の悪い仮面はがしだけでなく、おたがい人間的弱点を共有するものとして人と人とを結びつけてゆく働きや、遠い対象を身近にひき寄せて理解を深める働きなども含んでいるはずだ。表と裏を対比するというよりは、表もあれば裏もある、ふくらみをもつ全体として人間と世界をとらえ、表と裏との複雑な⑤絡みあいに私たちの目を向けさせるところに、むしろ裏の物語の重要な意味がある。だが、現代のメディアが提供する裏話や裏情報は、すべて利己的・**B** な動機に⑥カンケンすることによって世界を明快に割り切る傾向を強く示している。たしかに私たち自身、この種の裏の物語に接してはじめて「なるほどそうか」と納得する場合が少なくないことは否定できない。しかし、だからといって、裏からのシニカルな解釈だけが現実で、表に出ているタテマエや理想はすべて⑦キョギだというのは単純にすぎよう。現代人も決して理想を信じる能力を失ってしまったわけではないし、また、たとえそれが表面を飾る仮面にすぎなくても、④長くかぶっているうちに仮面と顔との区別がつかなくなるといふこともある。

シニシズム…常識を無視し、冷笑的に振る舞う生き方。同様の生き方を理想と掲げた古代ギリシヤの哲学の一派の名から。

シニカル …皮肉な。冷笑的な。

問一 波線部①②③のカタカナを漢字に漢字をひらがなに直して答えなさい。

問二 傍線部①とは、何がどうすることか。文中の言葉を使ってまとめなさい。

問三 傍線部②が指す語句を文中から十字以内で抜き出しなさい。

問四

A	・	B
---	---	---

に入る語句をそれぞれ次から選び記号で答えなさい。

ア 世界的 イ 規範的 ウ 童話的 エ 世俗的 オ 実在的

問五 傍線部③とは、どのような見方か。文中の言葉を使ってわかりやすく説明しなさい。

問六 傍線部④とは、どういうことか。四十字以内で説明しなさい。(句読点を含む)

問七 本文の内容に合致するものを次から選び記号で答えなさい。

ア 現代のメディアが提供する裏情報は、人間の隠れた一面を暴くことで対象を身近なものにし、理解を深めるのに役立っている。

イ 現代のマスメディアは新しい情報を提供することに力を注いでおり、報じられた話題について改めて検討する姿勢に欠けている。

ウ マスメディアの発達は情報の多層化をもたらすが、それにもない世界についての物語も裏と表とに二重化されている。

エ 自分を取り囲む日常の出来事に飽き足りなく思うとき、人はマスメディアの提供する物語に自分を同化し、楽しんでいく。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 に 答 え な さ い 。

近代文明の目指したものの、それは、神の軛くびきから人間を解放することだった。この軛は「自然」という形で解釈された。神の作品としての「自然」、神の計画が実現されていく現場としての「自然」、例えば近代の二人の代表的思想家と言われるデカルトとニュートンにとって、①「自然」は二様に解釈されたが、それでも「自然」が神の計画を内包するものであり、「自然」のなかに、創造主としての神の意志が内蔵されている、という考えにおいては、両者とも、明確に一致していた。「自然」であるということは、「神」の定めたことに従うということと、事実上同じであった。通常「近代」として規定される十七世紀においても、こうしてキリスト教的な神への信頼は揺いではいかなかった。

キリスト教にとつての、この安定した事態は、「文明」の②ハッショウとともに変わった。「文明」という言葉の欧語である《civilization》は、十八世紀に誕生したが、②その言葉の成り立ちからして、目指すものを正確に言い当てていった。《civilize》つまり「都市化」する主体が何であるかを言外に含んでいる。言うまでもなく、「都市化」されるべきは「自然」である。「自然である」とは、この文明というイデオロギーのなかでは、単に「野蛮である」ことにほかならない。他方、野蛮なる自然を「都市化」する主体は、当然ながら「人間」以外にはない。もう少し厳密に言えば、③神の軛から解放された十八世紀ヨーロッパの人間にとつて見えてきた「自然」は、もはや、デカルトにとつてのように神の計画を描き込んだ書物でもなく、あるいはニュートンにとつてのように神の力が常時働きかけている現場でもなく、人間の現実の生活の場であり、人間がそこから利を得、便利を獲得する対象に過ぎなくなった。そして、こうした目で眺められたとき、「自然」は、良く言えば、無限の可能性を秘めた④サクシユの対象であり、悪く言えば、人間の要求にとつて一向に経済的でも能率的でもない、⑤キョウセイすべき「未開」の対象と映ったのであった。「未開」の状態を経済的・能率的な状態へとキョウセイする、そのことこそ《civilize》の意味であり、「文明」が目指したものとなった。「都市」とは、人間が生活するために、自分たちの手で「自然」を改変し、造り上げたものである。そこで、未開の「自然」全体を人間が人間にとつて便利、能率的、経済的に管理できるような「都市」に仕上げることで、それが「文明」のイデオロギーであった。もつと簡潔に言えば、「自然全体の都市化」、それが「文明」すなわち《civilization》の目指す目標となった。したがって、以後、「反・文明」の思想が繰り返し生まれるが、それらは、色々の⑥ヨソオいを凝らすとは言え、何らかの形で、「自然」に随順し、「自然」のままに生きることをもって、その思想の中心とすることにもなった。

④こうした状況のなかで、「自然」という概念の意味や価値は多層化し多極化する。例えば文明派からも、反文明派からも、「自然」とは「人為の入っていない状態」であるとされ、前者はそれを否定し、後者はそれに大きな価値を付与する。しかし、文明側とて、山の緑や、海の青さを称えることにおいては、「人為の入っていない状態」にも、反文明派と同様の価値を置く。より歯に衣着せず言えば、それらが人間の生活にとつて必要であるという限りにおいて、文明のイデオロギーは「自然」を肯定する。

反文明派にとつても事態は変わらない。例えば、臓器移植について、その反対の理由としてしばしば「自然に反する」が挙げられる。「自然に任せるべきところにまで人為が介入することへの、ほとんど本能的⑦キヒとも受け取れるが、では、そうした場合の「自然さ」というのは絶対的な概念だろうか。かつて、日本社会でのアンケートのなかに面白い結果があったのを思い出す。あなたが最も好きな自然の風景を挙げて下さいという設問への答えとして、圧倒的に一位を占めたのは、「秋風のわたる水田に黄金色の稲穂の波が揺れる」だったのだ。これが「自然」とは。誰でも、少し考えれば、この風景がおよそ「人為の入らない状態」から遠いことは判るはずである。同じように、禁欲は「自然」なのか、荻野式は「自然」なのか、消毒薬は「自然」なのか、輸血は、臓器移植は、と問うていけば、「人為の入らない状態」と人々が思うものが、時代や社会や個人によって、実にまちまちであることに気付かされる。要するに、反文明派にとつても、文明派と同様、「自然」という概念は、自分が価値を置きたいと思う（価値を置きたくないと思う）もの（それはしばしば、比較的近い過去への懐旧、あの《good old days》感が含まれる）に被せられる相対的な概念でしかない。

時間に関する問題の一つが、エンデが『モモ』などで提起した文明的時間、すなわち人間本来の生活のなかでの時間性の収奪にあることははっきりしている。この問題についてのエンデの指摘が、非常に鋭く、しかも寓話という表現形態を採ったために、その文明批評（あるいは文明批判）が多くの読者の共感を得ることができ、近代文明社会のなかに優れた形で浸み透っていったことは、あらためて指摘するまでもないことだし、そのことの意味は強調し過ぎるということはない。

しかし、話がそこで終わっては、問題は前進しないし、恐らくエンデも満足しないのではないか（この「恐らく」という推測は私の買い被りかもしれないが）。例えば、近代文明は「空間」を克服したと言われる。「空間」と「時間」とは相補的であるから、それは「時間」の克服でもある。東京―大阪の距離は「自然的」条件であるが、文明の所産としての鉄道は、それを十二時間、六時間、三時間（いずれリニアなら一時間）というように切り詰めてきた。文明派はそれを社会の（したがって一般化すれば「人間」の）欲求に従った開発であるとす。そして人間の欲求は人間に与えられた「自然」であり、その発露に忠実であるに過ぎないという。反文明派はこれこそ人間本来の生活からの時間性の収奪であるとす。私もどちらかと言えば、後者の立場に

いる。

明らかに、人間は「三時間で東京・大阪間を移動したい」などという欲求を持つことはない。今三時間であるのは、今の技術がそこまでの可能性を許すからであるに過ぎない。その意味では、文明派の言い分のなかに「詭弁きべん」がある。しかし、では批判する側が根拠とする「人間本来の」生活とは何だろう。「本来」という語はヨーロッパ語では「自然」を意味する。英語の《nature》が「自然」でもあり「本性」でもあるのは知られた事実である。とすると、人間にとって「自然」な生活とは何か。ここでもまたあの「自然」という概念の意味の相対性が浮かび上がる。

ウシが草を食べるのが「自然」であるならば、人間が人為の手を自分の内外に加えるのも「自然」である。いや、人間が自分の手を使うことを否定すれば、それは人間という「自然」の否定にほかならない。ここでの「自然」は、相対性を持ち、意味の多層化した「自然」ではない。「この世に存在させられた」という意味での、したがってヨーロッパにおいて近代文明が出現する以前の、「自然」に相当する概念と受け止めなければならぬ。仮令「神」を持ち出すことはないとしても。

そうだとすれば問題は、人間の「自然な生活」などという形で、「本来」とか「自然」などという言葉に恣意的な価値を載せることにあるのかもしれない。意味の相対化された状態のなかで、人間にとって「自然・本来」の姿を言い立てるだけでは無責任である。

われわれにとって真の課題は何か。それは「A」としての「B」を「B」的に問題とすると、無限の自己言及を誠実に行うこと以外にはなからう。

軛：馬車や牛車などの乗り物の箱の台の下に平行して添えた二本の長い棒の先端に付けて馬や牛の首にあてた横木。転じて、自由を束縛するものの比喩として用いられている。

デカルト：フランスの哲学者（1596～1650）

ニュートン：イギリスの物理学者・天文学者・数学者（1642～1727）

イデオロギー：歴史的・社会的立場に基づいて出来あがった根本的なものの考え方。

歯にも衣着せすに言う：遠慮せずには言はずは言う。

荻野式：避妊方法の一つ

相補的：互いの欠けた部分を補いあう様。

エンデ：ミヒヤエル・エンデ (Michael Ende, 1929年生—1995年没)。ドイツの児童文学作家。

『モモ』：エンデが1973年に発表した児童文学作品。ある街に現れた「時間貯蓄銀行」と称する男たちによって人々から時間が盗まれ、みんなの心に余裕がなくなってしまった。そのなかで、貧しいけれど友人の話に耳を傾け、自分自身をとりもどさせてくれる不思議な力を持つ少女・モモの冒険によって、奪われた時間が取り戻されるというストーリーになっている。1974年にドイツ児童文学賞を受賞し、世界各国で翻訳されている。

問一 波線部①②③のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 波線部①は、どのようなことを指しているのか。該当すると考えられる部分をわかりやすくまとめて答えなさい。

問三 波線部②について、どのように正確に言い当てていたのかということ、**「都市化」**という言葉を使いながら、わかりやすく説明しなさい。

問四 波線部③の「自然」は、どのような対象として捉えられるようになったとしているか。同じ段落の中から、あてはまる部分を五〇字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

問五 波線部④は要するにどういうことを言おうとしているのか。七〇字程度でわかりやすくまとめなさい。

問六

A

・

B

に入る語句を本文から二文字で抜き出しなさい。